

2025（令和7）年度 栄養学部 保健栄養学科 保健養護専攻 編入学1期 小論文試験問題  
解答例

近年、ヤングケアラーの存在が社会的に注目され、国は相談窓口の整備や調査報告の公開など支援策を進めている。ヤングケアラーとなっている小中学生への支援を考える際には、単に負担を軽減するだけでなく、子どもの成長と発達の側面を踏まえた包括的な支援が必要である。小中学生は自己肯定感を育み、学習・友人関係・遊びなど多面的な経験を通して発達する重要な時期であり、この時期に家庭内の重い責任を担うことは成長上の課題や将来の選択肢の狭まりにつながる可能性がある。

まず必要なのは、早期発見と相談につながる環境整備である。本人は自分をヤングケアラーと認識できないことも多く、周囲の大人が気づく力が重要だ。学校での面談や家庭訪問などを通して生活状況を丁寧に把握し、必要があれば相談窓口へつなぐ体制が求められる。

次に、学習機会の保障が大切である。ケアに多くの時間を取られれば学習が不十分になり、意欲や自己効力感の低下につながる。放課後の学習支援やタブレット端末の活用など、個別の事情に合わせた支援が必要だ。また進路指導でも希望が制限されないよう、関係機関が連携し伴走支援を行うべきである。

さらに、仲間関係と情緒面の支援も欠かせない。ケアを担う子どもは孤立しやすく、不安を抱えやすい。同じ境遇の子ども同士が交流できる場や心理的支援は情緒の安定に寄与する。

最後に、子どもだけでなく家庭全体を支える視点が必要である。親の病気や障害、経済的困難など背景に働きかけ、外部サービスの導入や生活支援を通して家族の負担を分散することが重要だ。そのため、地域全体で子どもを見守る意識を高め、継続的な支援につなげる仕組みづくりも重要である。また、支援策を子ども自身が利用しやすい形で周知し、声をあげやすい環境を整えることも欠かせない。

以上より、教育・福祉・医療が連携し、子どもが安心して成長できる社会づくりが求められる。